



ポール・ゴーギャンによるタヒチ・クルーズ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-05-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀江, 珠喜 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/15373

ポール・ゴーギャンによるタヒチ・クルーズ

大阪府立大学教授 堀江珠喜

もしタヒチ観光旅行について相談されたなら、迷うことなくポール・ゴーギャンで島々を訪れるクルーズを勧めるだろう。もともとタヒチにはたいした観光地などない。上陸しても水上コテージのホテルくらいしかイメージが湧かないだろう。それらは写真でみれば美しいが、現実には高額宿泊料に見合う快適な設備とは思えない。(もちろん最終的には各々の好みと価値観によるのだが。)

また日本の旅行代理店によるタヒチ旅行企画商品の多くでは、タヒチ島の国際空港を利用するがボラボラ島かモーレア島のどちらかを滞在地として選ばなければならなかったりもする。実はどちらもあまり代わり映えのしないポリネシアの島々なのだが、それは訪れた者にしかわかるまい。せっかく日本は成田空港から決して安くはないエア・タヒチ・ヌイではるばる飛んで、この片方しか行くことができなければ心残りだろう。ましてやタヒチにはライアテア島やタハア島もある。その点、クルーズなら、これらすべてに寄港できる。さらに海から島々の美しさを眺められるのは、船旅ならではの特典だ。

そこで私が体験したパペーテ発着のポール・ゴーギャン7泊8日ソシエテ諸島クルーズについて記しておきたい。私が乗船したのは2010年5月1日から8日だが、政情不安もなく、のんびりした場所なので大きな変化はないと思われる。



ポール・ゴーギャン号



船内で買った乗船時の記念写真。
ポリネシアらしいレイアウトが美しい。

企画商品か個人旅行か

外国船クルーズの場合、私は日本の旅行代理店によるパック旅行を利用することもある。たとえば個人でクルーズ発着地と空港とのあいだの移動が面倒だったり、クルーズの前後に延泊して個人的に訪れたい場所が特になかったり、企画商品にかえて割安感を抱いたり、個人では予約しにくい場合などである。

タヒチについては、JTB ロイヤルロード銀座のクルーズセレクション「ポール・ゴーギャン 魅惑の楽園タヒチクルーズ10日間」を利用した。個人旅行でも飛行機は成田～パペーテの単純往復だし、乗船も問題はなさそうだったが、ちょうど

ゴールデンウィークにかかるので、エアの手配が個人では難しい可能性がある。また飛行機のパペーテ着が午前8時35分なので、乗船までどこかで時間を潰さねばならず、そのような雑費を考えると、決してロイヤルロードの企画品も割高とは思えなかったのである。さらにタヒチで延泊する気もなかった。

飛行機はエコノミーでも、長時間利用するクルーズ船の部屋では贅沢したい。またキャビンの場所にも好みがある。ビスタクラスでは船尾角部屋を選ぶが、ポール・ゴーギャンでは船首部右舷にポール・ゴーギャンスイート(801)があったので、これを予約した。部屋のサイズは約31平

米でベランダスイートより1割大きいだけで、バルコニーがし字型にあり、窓から前方が見える。操舵室の一階上である。ちなみに、このスイートより料金の高いオーナーズスイートは操舵室の左舷側すぐ後ろと右舷側2室めの2室（7002と701）であるが、私としては船首部で船の進行を実感しながら景色を楽しみたかった。また船名のついたスイートというのも気に入った。単純な、やや子供っぽい理由である。



船首部キャビンの専用バルコニー

本来のロイヤルロード商品では、丸窓付ステートルーム、バルコニーステートルーム、ベランダステートルームまでを企画していたが、私はキャビンの位置を調べ、ベランダステートルームより2ランク上のポール・ゴーギャンスイートを押えてもらった。もちろん追加料金（2人部屋で各々29万円）は発生する。阪急交通社のトラピックスでプリンセスに乗船したときには、このような融通は利かなかった。（阪急交通社でもワンランク上のクリスタルハートならアップグレード等が可能な場合があるらしい。）つまり、どうしてもキャビンの好みを優先させようとする、企画ツアーを利用できないこともあるのだ。



船首窓から見たモーレア島

幸い申込者が催行定員に達し、しかも全員がスイートまたはベランダステートを利用することになった。つまり全員が従来の企画の最上またはより贅沢なキャビンを選んだのだ。船首左舷のフローラ・トリスタンスイート（802）には一行のうちの（後日知ったことだが）日本でも有数の富豪夫妻が滞在した。私より後からこの旅行を申し込まれたので、察するところ、私のリクエストを参考に、ロイヤルロードがこのスイートを彼等に勧めたのではあるまいか。

もともとタヒチはほとんどの生活物資を輸入に頼っているため物価が高く、ハワイなどとは違い安上がりの旅行ができない。ハワイよりも見所ははるかに少なく、ショッピングの楽しみもない。

（南洋真珠もほとんどが香港市場に送られるため、タヒチには「観光客向け」レベルの商品しかないし、日本の宝石商が扱っている代物に比べ、まったく安くない。格安の真珠があれば、かなり品質は怪しい。）そのような場所へわざわざ出かけ、「5つ星」とも評価される船でクルーズを楽しもうというのは、かなりの物好きか富裕層かである。ロイヤルロード銀座なら、初めからスイート設定をしておくべきだったのではあるまいか。

ポール・ゴーギャンスイート

この船のチケットは豪華な青色ホルダーと船名が青糸で上品に刺繍された青色の袋に入れられ、自宅に届けられた。持ち運びには邪魔ではあるが、旅行の期待感が高まる。我々一行は船上でチェックインしながらウェルカムド



ポール・ゴーギャン号のテーマカラーの青いチケットフォルダー

リンクの冷えたシャンパンを楽しんだ後、それぞれの部屋に案内された。

ポール・ゴーギャンスイートは、キュナードのクイーンズグリルスイートよりは狭いのだが、機能的に内装がまとめられているので使いやすい。ウォークインクロゼットはないが、この航海ではブラックタイのドレスコードはないし、一週間程度のクルーズならふつうのクロゼットで充分だ。



ポール・ゴーギャンスイート

ソファは二人掛けだが肘掛け椅子が2脚あるので、2名なら招くことができる。(事実、乗船翌日には親しくなったフランス人夫妻を案内して、コーヒーとチョコレートでもてなした。)チョコレートはデラックスな箱入りが、初めからヴーヴクリコのフルボトルやフルーツとともに船側のサービスとして私の部屋に届けられていた。また小さなカセット式のエクспレッソメーカーがあったし、茶の用意もあった。



ポール・ゴーギャンスイートでのウェルカムシャンパンとチョコレート



用意されていたチョコレートの中身

スイートではバトラーサービスがある。またポール・ゴーギャンの便箋に我々の名前を入れて届けてくれた。なにかと届け物の多い部屋である。夕方にはおつまみが届く。



夕刻に届けられるおつまみ

バルコニーは期待通りに広い。ただし船首部は風当たりと日差しが強く、とても長時間いられたものではない。また夜は、夜景を楽しめるほどの都会がないので、結局、船首部バルコニーは自己満足のための設備であり、実用的ではなかった。しかし満足感は、いかなる場合においても重要なポイントである。もしポール・ゴーギャンスイートに滞在できなかったら、クルーズの間中、いやその前後も、ずっと欲求不満状態が続いたと思われる。それほどキャビンの位置は私にとって大事なのだ。

バスルームも機能的で、アメニティは当時女性に人気のあったロクシタンである。個人的には私の好みの香りではないが、これに喜ぶ女性は多かっただろう。シャンプー、コンディショナー、ボディローション、石鹸の銘柄が贅沢を演出するのは陸のホテルと同じだ。(もちろん陸の高級ホテルでは、さらにランク上の銘柄が当たり前である。たとえばモナコのオテル・ド・パリではラ・

プレリー、ブエノスアイレスのアルベアールではエルメスだった。)なおこの船ではほとんどのキャビンに浴槽が設置されているようだ。

食事

このクルーズはアルコール飲料もインクルーシヴである。もちろん高級ワインは適用外であるし銘柄の選択肢は少ないが、それでかまわなければいくら飲んでも追加料金は発生しない。言い換えれば下戸は飲めない酒代まで、前もって払わされていることになる。またアルコール好きは、飲み過ぎるくらいがあり、私としてはこのシステムは気に入らない。近くのキャビンに滞在するオレゴンから夫婦で来たというユダヤ系(と本人が自己紹介していた)中年白人弁護士男性マイケルは、昼間から酔っぱらっていた。概してユダヤ系白人は親日的なので愉快的な出会いが多いが、ハーイ、といきなり酔っぱらい男性に抱きつかれるのは、いくら呉越同舟と言われてもウェルカムではない。

さてレストランは、日替わりメニューだが夕食だけのメインレストラン「レトワール」と朝食と昼食のとれる「ラ・ベランダ・レストラン」がある。後者は夜、追加料金は発生しないがメニューは航海中変わらないので、何度も行くと飽きる。それでも、こちらのほうが限界があるにせよ細かい注文がしやすく、フィリピン人のマネジャーともすぐに親しくなったので利用することが多かった。



レトワール



ラ・ベランダ・レストラン

屋外ではル・グリルが3食を提供するが、日中は暑いし、夜は「サウスパシフィックのテイストを加えた料理」ということだったが、南太平洋料理よりフランス料理のほうが美味しいはずと思い、ここでは(ラ・ベランダがなぜか営業しなかった)昼に一度食事をしただけだった。なおルームサービスは24時間可能である。

このときは添乗員付きの企画ツアーだったが、せっかく外国に行ったなら他の日本人客と距離をおいて行動したいという我々夫婦の主義なので、食事は別のテーブルやレストランを選んだ。結局、すぐに前述のフランス人夫婦と仲良くなり、一緒に食事をするようになった。そのようなとき、ワインがインクルーシヴなのは気が楽ではある。他にもフランス人客は多いのだが、ストラスブール出身のこのカップルはゲルマン系のようで、どうやらラテン系フランス人よりも、フランス語の怪しい我々との付き合いを好んだと思われた。

5月4日は誕生日なので、ラ・ベランダ・レストランでバースデーケーキを用意してくれた。クルーズでは予め誕生日や結婚記念日を伝えておくとなんら



バースデーケーキ

かのサービスをしてくれることが多い。誕生日はパスポートで確認可能なので嘘はつけないが、結婚記念日などは証明書がなく自己申告のみである。我々夫婦は事実婚で別姓であることを利用し、旅行申し込み時に「ハネムーン」扱いにもしてもらった。これについては後述する。また目先を変え

て、5月6日にはタヒチアンディナーと銘打った夕食が、メインレストランで出された。テーブルセッティングがポリネシア風にされていたが、そもそもフランス料理自体が無国籍化している今日において、タヒチアンといわれても料理自体は印象に残るものではなかった。しかし逆に、それはマイナスポイントも無かったということでもある。ポール・ゴーギャンには、とりたてて欠点がない。安心して乗っていただける船とサービスであった。



ラ・ペランダ・レストランのデザート



ラ・ペランダ・レストランの昼食にはスシが出ることもある

船内イベント

2万トン弱で乗客定員330人という規模なので、「ラグジュアリークラス」の船とはいえ当然ながら高級ライナーの伝統を誇るキュナードとはずいぶん勝手が違う。まず、この地域の影響なのだろうが、船全体がのんびりした感じだ。従業員のほとんどがフィリピン人で陽気なプロフェッショナルなのだが、(おそらくローカルな、ゴーギャンの絵画的雰囲気を盛り上げるために雇われている)ポリネシア人女性たちには、まったく労働意欲が感じられない。彼女たちが担当するはずだったフラダンス教室もフランス語のレッスンも、5分で終わったり、初めからサボタージュで不開講だったり、ひどい有様だった。ただし、あんなポリネシア訛のフランス語なんぞ、教わらないほうが

いいだろうが。結局は日本人客を相手に、私が30分ほどフランス語を教えることになってしまった。おそらく、これは私の職業病である。

昼間は観光やマリンスポーツを楽しむ乗客が多いので、まともにイベントを運営しようなどという気が、そもそも船側にはないのだろう。またフランス人はおしゃべりが好きなので、それさえできればイベントなど不要のようだし、酒好きは飲んだくれている。それぞれが好きのようにヴァカンスを過ごすのが大人のフレンチスタイルなのだろう。南洋にまで来て、船上で教室やレッスンなど笑止千万とも言えそうだ。

そんなわけで本格的に「船内」生活が始まるのは夕方からである。偶然ながら私の誕生日の5月4日には5時15分から新婚カップルと結婚記念日カップルのためのアフタヌーンティーがあり、大きなケーキが用意された。写真屋が来て、ポリネシア風に大きな布でカップルを巻き、キスシーンを撮影する。我々は前述のようにハネムーンを偽ったので、このときの写真一枚は無料で貰えた。フランス製スパークリングワインのボトルも部屋に届けられた。マッサージ用オイルの小瓶セットもベッドの上に置かれていたが、成分がわからず怪しいので捨ててしまった。旅先での皮膚トラブルは御免である。また後から日本の自宅に、ポリネシアの地図のラベルに我々の名前が入ったフランス赤ワインが送られて来た。これだけサービスがつくのだから、ポール・ゴーギャンでは似非新婚を装うことをお勧めする。



ブライダル・イベント

小さい船だが、グランドサロンではフィリピンバンドが入り、社交ダンスが小さなフロアで楽しめる。踊るのは我々夫婦を入れてせいぜい4組だから、充分の広さである。すぐに顔なじみになっ

た。特にダンス好きの夫婦はフランス人であった。

このグランドサロンがポール・ゴーギャンでは唯一の大きな部屋なので、船長によるウェルカムパーティや、さまざまなショーがここで催される。5月4日にはこの船のエンターテイメント係で歌手のマイケルがワンマンショーを行った。我々は最前列中央に座っていたので、*YOU CAN' T TAKE THAT AWAY FROM ME* の間奏曲で、マイケルが私に手を差し出し、彼と数ステップ踊ることになった。ショーの前に我々が踊っているのを、チェックしていたらしい。この歌が終わると、フィリピン人ウェ이터が紙切れをマイケルに渡した。彼は「リクエストかな」と言いながらそれを読む―“YOUR DANCER IS BIRTHDAY TODAY”。

その日は朝から自分の誕生日であることをレストランで吹聴して回っていたのが効いたようであった。マイケルが驚いたように私を見、私は微笑んで頷く。バンドがバースデーソングを演奏し始めるや、再び私はマイケルと数ステップ、今度はスキップをしてお辞儀をした。このショーの最後にマイケルは自分のCDを宣伝し、ダンスのお礼にと私にプレゼントしてくれた。彼のCDが売れたとは思えないが、この日のショーは大成功で、スタンディングオベーションと「アンコール！」の声が場内から沸き起こり、マイケル自身が感激していたようだった。

日によっては乗員によるショーがあつたり、ポリネシア人女性がゴーギャンの絵のようなポーズをしたり、ダンサーが雰囲気盛り上げるポリネシアンショーもあった。大型船のレビューと異なり金をかけていないが、素朴でそれなりに楽しめた。私としては、ダンスさえできればクルーズのショーなど、どうでもいいのだが。このような航路でも揺れのひどい夜があり、船酔いで船室に引き籠もった客が多くまっすぐ立つのも難しかったときにも、我々はアフターディナー・ダンスを踊りに行った。飛行機なら絶対にシートベルトを締めさされるような状態だったが、船には自由があつていい。逆に、踊りにいかなければ船酔いに苦しんだに違いない。



ゴーギャンの絵のポーズをとるホステスたち



ポリネシアン
ダンサーたちと
記念撮影

スペシャルなイベントとしては、ブリッジへ招待されたことであろうか。田中博が船についての質問を書面でコンシェルジュに渡していたので、それが船長に届き、招かれることになったものと推測される。航海場所が場所だけに、ブリッジにもものんびりした空気が漂っていた。



ブリッジ



フェアウェルイベント

▶ 客層

乗客にはアメリカ人も多いが、フランスからも少なくない。さすがはフレンチポリネシアだ。英語の苦手なフランス人にはちょうど良いだろう。船内新聞にはフランス語版と英語版がある。パブリックスペースで英語表示しかなかった場合、文句を言うのはフレンチカナダ人客だった。アメリカ人ならハワイのほうが安上がりで言葉も楽だろうが、わざわざタヒチへ来るのは、前述のオレゴンの弁護士夫妻のように、裕福な中高年と考えられる。

また白人男性のゲイカップルも目立った。裕福な白人ゲイ男性たちが、この船を借り切ってクルーズを楽しむこともあると聞いた。キューナードでもゲイの男性客はいるが、女性客とも楽しく話す輩が主流である。しかしこのときポール・ゴーギャンに乗っていたゲイ男性たちはおしゃれで品は良いのだが、自分たちと「同族」でなければ無視する手合で、我々ストレート客たちとは同じ空間にいながら挨拶を交わす雰囲気でもなく、(そもそも文学専門の私はオスカー・ワイルドや三島由紀夫の研究者なので、ゲイ男性にたいする差別感情はないのだが) さすがに彼等の近くでは居心地が悪かった。

場所がら、服装はカジュアルではあるが、特に目を被いたくなるようなひどい格好をする客はいなかった。女性客のなかには現地の土産物店で購入したとおぼしきポリネシア風の衣装を品良く楽しむ者もいて、タヒチの気分を盛り上げていた。もちろん南洋真珠を早速つけて披露している女性も多かった。前述のように、ちっとも安くないし、ダイヤモンドが使われるデザインでは日本国内よりかなり高いと感じられたが、旅の思い出を込めた宝飾品はやはり魅力的ではある。

このようにポール・ゴーギャンは、あくまで大人向きの船である。キューナードのクイーンズグリルススイートに比べても料金は高いし、どうしてもタヒチを再訪したいとも思わないので一度乗ったきりだが、くだんのストラスブル仏人カップルは、マリンスポーツが好きなので翌年も乗船したらしい。このようなゆったりしたクルーズは、まだ日本人には馴染めないのか、旅行社の企画ツア

ーでもあまり扱いが無いようだ。だが大型船のクルーズに魅せられた客が、そのうち、ふとアメリカの大衆文化とは対極にある、このような乗客が主体的にヴァカンスを楽しめる船を、試してみたいくなるかもしれない。



プールサイドからの眺めも良い



自宅に送られてきた我々の名前入りワイン